

ベルリン封鎖直後日記

清水良三

目次

- 一、はじめに
- 二、本論——一九四八年六月廿八日～七月十五日——

一、はじめに

前号の論文「ベルリン封鎖前後日記」（国士館大学政経論叢・平成元年第三号・通号六九号）においては、一九四八年六月十八日から六月廿七日までのベルリン状態を日記体で叙述したが、同論文の注の四七において述べた通りの事情で、本号では六月廿八日から七月十五日までのベルリン状態を同じ日記体で叙述することとする。

ベルリン封鎖直後日記（清水）

数ヶ月間にわたってベルリンの危機は徐々に醸成されて来たのであるが、六月廿四日前後の一週間にわたって、特に兪悪であった。そして六月廿七日（日曜日）の午後、ワシントンのロワイヨール陸軍長官の事務所で行われた会合はソ連によるベルリン封鎖の試みへの対策問題に、米国防務省がはじめて正面から取組んだものであった。だが其の時においてすら、空輸については比較的僅かな注意しか払われていなかったのである。そして空輸の実現可能性については、未だ詳しい評価はなされてはいなかったのである。だがこの事は、当時の状況ではさして驚くには当たらないことであつた。何故ならば、当時在ヨーロッパ米軍司令部の内部においてさえも、どの程度まで空輸の規模を拡大し得るかについて大きな疑惑が抱かれていたからである。

二、本論——一九四八年六月廿八日と七月十五日——

六月廿八日（月曜日）——トルーマン大統領の決意——

アメリカ合衆国のベルリン対策は、問題がトルーマン大統領のところを持って行かれるや否やはっきりした。大統領官邸における会議でラヴィット國務次官は、日曜日にペンタゴンで行われた討議について報告した。彼の概括説明がアメリカ合衆国はベルリンに留まるべきかどうかについての特別の問題のところに来た時、大統領が発言した。此の点については論議の余地はないと大統領は述べた。「我々はベルリンに留まる。それで終りだ」。ロワイヨール陸軍長官は、此の問題が残りなく検討されたのかどうかについて、「多少」の関心を述べた。ベルリンへの道が確保されることが予めはつきりと分らなければ、ベルリンへの道をたたかいたらなければならなくなるような立場に飛込んでし

まうべきではないと彼は考えた。大統領は、「われわれは事態の発展に即応しなければならぬだろう」。だが「吾々は協定に従ってベルリンにいるのであって、ロシア人たちには、直接または間接の圧迫によって吾々を追出す権利はない」と答えた。^①

此の会合でトルーマン大統領は、B 29爆撃機をドイツに派遣することを承認した。此の決定については、ベルリンからの通信でクレイ將軍の同意が得られていた。当時のアメリカの軍事的弱勢から考えて、強化手段としてクレイ將軍の利用し得たものは、ほかに何もなかったのだということ、フォレストル日記の編纂者は述べている。^②

英国外務省もまた同じように、確固とした立場をとろうとしていることを、ロンドンからの電報は示していた。政府の一スポークスマンは、ベルリンに留まる英国の決意を何回も繰返して述べた。ニューヨーク・タイムズのロンドン特派員の報道は、「ロシア人はベルリン状勢において後退を余儀なくされるであろうという静かな自信が、今日此の頃、政府各分野に生じて来たようだ」と述べ、そしてまた英国人は、ドイツの輿論を強く振起させ、封鎖政策を遂行することは、モスコウ政府にとっては得策ではないということ、ソヴィエトの計画を挫かせる最善の望みだと信じていると報じた。「もしもベルリン人が飢餓に頻するようなことがあれば、それはソヴィエトの失敗の故であるということを、事実によってドイツ人に印象づけるために、あらゆる努力が続けられるであろう」。だが、同時に戦争の脅威が一般ロンドン人および、多分、全英国の人たちをはじめ襲ったというところでは、何処でも戦争のことが話されるのが聞かれた。

ベルリンにおいては、一般市民および市政府当局の両者に対して、共産主義者の圧迫が続けられていた。ソヴィエト軍政府は市政府執行部に対し、ベルリン郵便局が西側諸国のスタンプをおした手紙や小包を、受取らないようにと

いう一方的な命令を出した。西側諸国はこれに対して、此の命令は不法であって無視すべきことを市政府執行部に告げた。^③

明らかに次第に失われて行く自己の人気を挽回しようとして、ベルリン社会主義統一党はソヴィエト軍政府に対し、ソヴィエト地区からのミルクを全ベルリンの病人および児童に供給するよう公然と要求した。^④

ベルリン市政府執行部の会合においては、社会主義統一党とソヴィエトとの関連の密接さを説明する一事件が起きた。共産主義者ではない一市会議員が、フランスはベルリン市政府からの提訴を国際連合に持ち出すべきかどうかについて論議していると報じ、しかもフランスのこのような動きに対して、ソヴィエトがどのような態度をとるかについて迷っていると述べた時、市政府執行部員で共産主義者であった一人が、私はソヴィエトの態度を知ることが出来る」と述べた。彼は部屋から出て行ったが、それは多分電話をかけたに行っただけであろう。少しすると彼は、此の問題を国際連合に提訴せんとするフランスのいかなる動きにも、ソヴィエトは反対するであろうというニュースを持って帰って来た。此の日、特にベルリンの一般市民を対象とした最初の補給品を積んで、英国空軍が飛んだ。十三回の飛行で英国空軍は四四トンを運んだ。^⑤

六月廿九日（火曜日）——空輸に希望の兆あらわる。

空輸は激励のためのゼスチャー以上のものであるということが、西ベルリンの新聞によってはじめて認められた。空輸に関するそれまでのニュースは短く取り扱われ、どちらかというとはっきりした立場が打ち出されていなかった。だが、廿九日のターゲスシュピーゲルのトップの見出しには、「空輸による十分な補給が可能である」と書かれ

てあった。一連の報道記事が此の見出しの信憑性を裏づけた。一つの記事は、アメリカの国防省が各機七トンの輸送可能な飛行機を、二十機から四十機西独へ送ることに決めた旨を報じた。別の記事は、十三機単位の輸送機がどのようなにしてアラスカやカリビア海の基地を立ち、ドイツに向っているかということを報じた。一編隊は予備としてハワイに置かれていたものであった。ロンドンからの報道は、少くとも百機の英国空軍が、英国地区に飛来して空輸に参加するよう命令を受けたと報じた。新聞の報道は、西ベルリンの日々の食糧必要量は一一〇〇トンであるから、此の都市に飛行機で補給することは、明らかに可能な範囲内にあることであると述べた。「テリグラフ」はそれよりも多少慎重な態度をとっていたが、それでも空輸で此の都市に補給することが出来るかも知れないという希望を述べた。^⑥

此の日の午後、最初の四発スカイマスター機がテンペルホーフ飛行場に轟音を響かせて着陸した。^⑦

空輸が完全に可能であるということは、未だ認められていなかったけれども、アメリカ合衆国空軍ヨーロッパ司令部は、空輸体制確立の努力をつづけていた。空輸作業は数日間を終るようなものではないことは明らかであったので、一定した作業の繰り返し様式へ持ち込もうとする努力がなされた。ジョセフ・スミス准将の指揮下に特別作業部隊が既に編成されており、空輸に参加していたすべての合衆国部隊がこれに当てられた。空輸作業の継続期間は四十五日間と予定されていた。^⑧

空輸作業計画の立案に従事していたエドワード・ウイラフォード少佐は、空輸に関する最初の軍の諸会合の一つについて、次のような非公式の報告をしている。

六月廿九日頃、われわれは大きな参謀会議を開いた。私はC54型（スカイマスター）機が世界中から集まって来つつある事を知っていた。会議でわれわれの実行可能性について、予定を作成すべき段階に来た時、私には既

に準備が出来ていた。スミス將軍が私を指命した時、私は立って次の如く言った。「七月廿日までには吾々は廿四時間毎に一五〇〇トン空輸し得ることになるだろう」。私は得意げに周囲を見廻した。皆は驚き切った様子で私を見つめていた。彼らの顔には皆こう書いてあった。「哀れな老人ウイラフオードは頭が変になっている。彼が狂暴になる前に、皆んなで彼の着けている狂人用のジャケットを掴んで引止めようじゃないか」。何故ならば貴方も知っている通り、其の日われわれは顔の形相が変るほどの苦しい努力をして、三八四トンを運び込んだところだった。しかるに、二週間を一寸越す位のうちに其の量を四倍にするなんてことは、今振返ってみても、正気の沙汰とは思われなかったからである……とにかく、もしも貴方が劇場で、われわれが何時でもそれをすることが出来ることを知っていたと言う人に会ったならば、取り合わないで頂きたい。われわれは何時いかなる時でも、解答のすべてを知っていたことはない。われわれ自身驚いている位である。^⑨

ベルリン政府当局者も市議会の議員も、空輸の可能性についてはいぜんとして懐疑的であった。市議会で市長代理フリーデンスブルグは次のように述べた。

飛行機による或る種の代替輸送が開始されたことを聞いて、吾々は喜び且満足している。われわれは此の緊急輸送措置が将来大いに拡大される事を希望するであろう。然し、紳士並びに淑女諸君——私は事態の重大性について何の疑いも残さないために、本当にはっきりとっておきたいのだが、此の方法ではせいぜい食糧補給の一部が確保されるに過ぎない。私の判断し得るかぎり、必要なすべての食糧を補給することは不可能である。しかも空輸によって石炭の支給を確保する事は完全に不可能である。かくして、それに伴う他の結果についても、私は言っておきたい——即ちそれは料理用の必需品、特に水の補給を維持することの可能性であるが、それはいか

に寛大に考えても、空輸手段によって確保出来ないものである。^⑩

ベルリンの総ての需要に、空輸で応ずることは不可能であろうということを確信した三つの民主主義政党は、従来よりもさらに烈しい強さで、国際連合への提訴を主張した。だが彼らの主張は、同じように烈しい社会主義統一党の反対に遭った。行われた烈しい論争の中で、社会主義統一党の代表マロンは、民主主義諸政党がベルリンを分裂させようとして、人々の間に恐慌を起させていると非難した。彼はさらに付け加えて、次の如く述べた。

もしも此のゲームが、きわめて重大な結果をもたらす可能性を含んでいないのならば、人は此のゲームを楽しむことが出来るかも知れない。既に鞆の荷造りを済ませてしまい（社会民主党、キリスト教民主同盟および自由民主党席から笑声）出動命令を受けている三千機の飛行機のどれか——これらの飛行機はどの飛行機も多分一つづつの原子爆弾をベルリンへ運ぶことになっているであろうが（社会民主党、キリスト教民主同盟および自由民主党席からまたも笑声）——に乗って逃亡することを考えている人にとっては重大なことではない。だが、逃亡の準備をしつゝあるこれらの人たちによって、混乱の種をまかれた人たちにとっては、結果は重大となり得るであらう。^⑪

社会主義統一党の反対があつたにもかかわらず市議会は、市政府執行部が起草した提訴状を、国際連合に付託するか否かについての投票を行った。その提訴には「援助がそうはやく行われることがないとしても」^⑫、国際連合の干渉が一ヶ月以内に為されて欲しいことが「非常な熱意」で述べられていた。

暴徒が将来市政府執行部および市議会を威嚇することのないよう、市公会堂の周囲に立入禁止区域を設けるかどうかについて市議会が討論した時、さらに別の混乱が続いて発生した。前回の会合の後で共産主義者の暴徒になぐられ

た経験のあるジャネット・ヴォルフが、当時群衆の中の何人かが、社会主義統一党の議員をも含めて社会主義統一党の指導者たちから指示を受けていたのを聞いた旨を語った時、社会主義統一党の側から特に烈しい質問の矢を受けた。

だが、紳士並に淑女諸君——社会主義統一党の諸君をも含めて——貴方がたは一つのことについて明確に知っている筈だ。圧迫はこれに対抗する圧迫を生むということを、私はかつて言ったことがある。私は今日此処で言いたい——たとえ貴方がたがケッスラー氏を笑おうとも、何故ならば貴方がたも又中庭に引込んでいたからだ——私はここで言いたい（メヴィス議員（社会主義統一党）が「ナンセンスなことを言うな」と叫ぶ）——私はナンセンスなことを言わないという非難を受けよう。わが親愛なるメヴィス氏よ、私は恐れてはいない。私は私の家庭を破壊してしまったゲシュタポを恐れてはいなかった（社会主義統一党から「われわれも恐れてはいない」という叫びあり）。私は私の仕事をつづけたのだ。そして紳士諸君、私は貴方がたが脅迫の道具にしている「結果」を恐れてはいないのだ。（社会主義統一党より妨害あり）。何故なら私は失うべき生命は一つしか持っておらず、そして此の生命は自由に捧げてあるからだ。そして、紳士諸君、もしも其れが貴方がたの考えで私の生命に値し、そしてそれによってベルリンの自由が維持されるのならば、私は何時でも死んで行く用意があることを宣言する（社会民主党から拍手）。紳士諸君、貴方がたが私から奪うことが出来るもの……

紳士並びに淑女諸君、此の建物の周囲に立入禁止区域を設けることが必要である（社会民主党から「そうだ」という声）。私の為ではない——此れは一人の人間についての事柄ではない——此の議会の尊厳性のためである。何故なら、我々は一九一九年から一九三三年までの間に経験したことを、再び経験したくはないからである。われわれは現在持っているほんの一寸した自由を拡大したいと思う。かつて吾々をナチスから解放してくれた占領諸

国が、全ヨーロッパのための自由のための闘いが、ベルリンにおける自由のための闘いの中に含まれていることを認めないならば、かりに世界が再び戦争の渦中に投げ込まれたとしても、其の罪は此等占領諸国が負わねばならないだろう（社会民主党から盛んな拍手）^⑬。

市議会の此の会合で行われた演説のうちの三つは、後でベルリンの出版業者ロタール・ブランヴァレットによってパンフレットとして出版され、ベルリンおよび西ドイツに広く頒布された。

当時としては議会における討論ほどの注意をひかなかつたけれども、長い眼から見れば同じように重要であつたらうと思われるのは、色々な市の諸機関や市有の諸企業の独立労働組合の代表者たちの会合であつた。独立派の労働組合主義者たちは、四月の労働組合中央会議への、過半数の代表者を選出した。だが、共産主義者の指導者たちは、独立派労働組合の代表者のうち廿三人は、不正な選挙によって選ばれたものであると主張し、従来の執行委員会を其の儘継続せしめた。独立派の代表者たちは六月廿九日に会合し、彼ら自身の組合である「公共事業並びに政府職員協会」[The Association of Public Service and Administrative Workers] を設立した。構成員の大部分はベルリン電気会社、消防署、警察の人たちであり、残りもっと小規模な市の諸機関の人たちであつた。^⑭

此の新しい組織の設立によつて、市職員に対して持っていた共産主義労働組合の権力が打破されたという事實は、其の後の経過においてもっとも大きな意義を持つに至つた。食糧加工工場の労働者を代表する諸組合の別個の代表者たちもまた、彼ら自身の組織をつくるために六月廿九日に会合した。^⑮

独立労働組合主義者たちの組織化が進むにつれて、共産主義者の支配する鉄道管理局が、鉄道労働会議議長および其の他四人の著名な労働組合員を含めて、独立派労働組合主義者と目されるに至つた人たちを、誡首しつゝあるとい

う報道が伝わった。これらの馘首について鉄道管理局は、色々な紛いの理由をつけた。^⑬

火曜日にヨーロッパ復興計画への特派使節・W・アヴェレル・ハリマン W. Averell Harriman がベルリンに到着した。彼は報道関係者に、彼の来訪はドイツ復興計画と関係はあるが、ベルリンの現状とは関係ない旨を述べた。

空輸の規模が拡大し、ベルリン人たちが共産主義者たちの圧迫に譲歩する様子を見せなくなるにつれて、ソヴィエトの態度が軟化するかも知れないという兆候が、少くも二つあった。ロバートソン將軍への静かな和解の調子の手紙でソコロフスキー元帥は、市の保存食糧が尽きてしまう前に、西独からベルリンへの鉄道は再開されるだろうという「希望」を表明した。そして、復興を急ぐためのあらゆる努力がなされていると述べた。だが彼は、西側の通貨の流入を阻止するための「保護措置」は、当分の間つづけられなければならないだろうと宣言した。そして更に付け加えて、「私としては、英米当局が飛行機によって、西側地区との交通を維持しようとして、精力的にとっている措置の価値を認める。私は航空安全規則が十分に且注意深く守られることを希望する」と言った。^⑭

もう一つのソヴィエトのゼスチャーは、六月十九日以前に発行された地域間通過証を持っているドイツ人に、西側所管諸地域からソヴィエト地域への移動を許可したことであった。ニューヨーク・タイムズの一通信は次のような希望的観測を述べた。「封鎖体制の此の一部崩壊は大規模なものではないけれども、今日まで頑固そのものであったロシアの封鎖態度の、明白な変更を示すものである」。^⑮

共産主義新聞の見出しに見られた妥協の態度はそれよりも少かった。社会主義統一党の機関紙・ノイエス・ドイチュラントは、依然として西側の通貨改革、社会民主党および西ベルリン新聞の「挑発的態度」の非難を続けた。だがそれは、ワルソー外相会議は平和への道を示すということを通じて、封鎖を終了させる条件を暗示した。其の見出し

にはまた、ベルリン向のポーランド産の石炭三万六千トンが引渡されたこと。更に其れ以上の石炭が到着しつゝあるという記事も掲載された。別の記事は、西ベルリン人がソヴィエト地区に來ても食べて行かれないことはないし、或はひきずり出されることもない旨を確言し、西ベルリン人たちは、西側通貨よりも遙かに上質な東側のマルクを得たので、ソヴィエト地区にやって來るのだという事を確信をもって述べた。

六月三十日（水曜日）——英国ライオン咆哮す

水曜日にロンドンの英国議會は、ベルリン危機について、かつて西側諸国のどの国もしなかつたような強力な声明を發した。ベヴィン外務大臣は、英国がベルリンにおける其の立場を維持する旨を約束して、次の如く述べた。

吾々は此等の決議の結果として、重大な事態が発生するであろうことを認める。そのような事態が発生した場合、われわれは本議院が其の事態に直面するよう求めなければならぬであろう。わが英国政府および吾々の西側の同盟国にとっては、此の事態に直面することと、降伏することとの間に、選択の余地はない、われわれのうち降伏を受諾出来るものは一人もいない。²⁰

ベヴィンは此の討議で「仮りに率直に言うとなればわれわれは……吾々は戦争の危険に直面しなければならぬ」とさえ言切つた保守党代表のハロルド・マクミランと同じように喝采を受けた。一共産主義議員を例外として、全議員は政府の立場を支持した。

ベヴィン外務大臣はまた、空輸とベルリン人の両者に、賞讃の言葉を述べた。彼は空輸によって達成される結果が最初考えていたよりも大きかつたと述べた。ベルリン人について、彼は次の如く述べた。

ソヴィエトの圧迫に屈服することを拒否している勇敢なベルリンの民主主義者たちを、われわれは棄てることは出来ない。多くのベルリン人の志気は盛んである。ソヴィエトの排他的な支配に屈服するよりも、どんな欠乏にも耐えた方がよいとする彼らの決意には、全面的な支持が与えられなければならない。²¹

ワシントンにおいてはマーシャル國務長官が、これまた確固とした声明を發した。

吾々はドイツの占領地域についての政府間協定の結果として、ベルリンに駐屯しているのであって、われわれはとどまる……一方、一般市民に補給するために空輸力が最大限に使用されるであろう。研究の結果、飛行機で輸送出来る食糧および補給品の噸数は、当初考えられていたよりも大きいことが判明した。

此等の發言は、さらに廿台のB 29爆撃機がドイツの基地に向けて派遣され、その結果、アメリカ地域におけるB 29の総数は三十機になるというニュースによって裏付けられた。²²

ハンブルグにおける西ドイツ社会民主党の執行委員会の会合で、ベルリン社会民主党委員長フランツ・ノイマンはベルリンにおける最近の事態について説明した。その結果、西独社会民主党は、ベルリン人を支持する旨を約した決議を採択した。そして西独全般にわたって「ベルリンを救え」という集会を持つとする計画を立案し、また私人からの寄附を集めようという計画も立てた。

共産主義新聞は殆んどその全面を割いて東独のための「二ヶ年計画」の發表と、此の計画を説明するヴァルター・ウルブリヒトの演説文を掲載した。ウルブリヒトは此の計画が全てベルリンを対象にしているものであることを明らかにした。「本計画でわれわれは、特にベルリンの名を挙げなかった。だが、将来ベルリンは（東）ドイツ経済委員会から補給を受けなければならなくなるだろうと吾々が考えている事実を隠すつもりはない」。彼はさらに続けて、

ベルリンの経済は東側に属している。西側諸国の代表はベルリンには必要ではないと述べた。ベルリンへの食糧補給体制は、西側諸国の代表が到着する前に円滑に其の機能を果していた。戦争犯罪人を保護し、労働組合を分裂させることが、彼らのしたことのすべてである。さらにウルブリヒトは甘言を弄し、二ヶ年計画によってベルリンおよび東ドイツの食糧補給を三〇パーセント増加することが出来るだろうと述べた。²⁴

七月一日（木曜日）ソヴィエト四国統合施政部（コマンドトゥーラ）より脱退す

ソヴィエトの代表は六月十六日のコマンドトゥーラ Kommandatura（四国統合施政部）の会合の時に、席を去ってしまったが、公式に四国機関から脱退してしまつた訳ではなかつた。だが、七月一日にコマンドトゥーラへのソ連邦代表団の主席代表は、他の三国の首席代表たちを招いて会を開き、ベルリンの四国施政体制はもはや存在しない旨を告げた。彼は西側地区の通貨を導入するにあつたの西側三国の一方的な措置について述べたばかりでなく、「ハウリー大佐のかくれなき行為」についても述べた。そしてコマンドトゥーラの会合がもはや行われ得ないような状態となつた旨を宣言した。²⁵

ソヴィエト代表が計画されていたすべての会合に出席しなかつたにもかかわらず、この時まで此の四国委員会の機能が續いていたという事は注意するに値する。だが、七月一日以降、ソヴィエトの委員たちは決して現れなくなつた。赤軍軍人はコマンドトゥーラの事務所から綴込書類の撤去をはじめた。そして建物の前に立てられていた赤旗は遂に引下ろされた。²⁶

コマンドトゥーラからのソヴィエトの公式の脱退に遭つた時、西側諸国は四国協定によって設立された組織を、一

方的に解散することは出来ないという態度をとった。²⁷

ロンドンにおいては此の衝突は、どうしても最終的なものとは思われないという感じで受けるむきもあった。英国外務省の一スポークスマンは、マーシャル・ソコロフスキーの動きには、何時でも「出口」が残されていたという点を指摘した。例えば、道路や鉄道を止め、電流を切断した時の彼の言訳は、「技術的な困難」ということであつた。いかなる場合にも、彼が完全に最終的な態度をとつたことはない。そのため、此の事でモスコウ政府に公式の抗議をすることは誤りであろう。何故ならば、そうすればソコロフスキー元帥が面目を失わずに戻ってくることを、難しくしてしまふであろうから、と其の英国のスポークスマンは彼の信念を述べた。²⁸

ベルリンでは共産主義者の宣伝は、何時もながらの線を追って続けられていた。討議の対象となる問題点は、もはや「西側諸国はベルリンを去るだろうか」ということではなく、「西側諸国は何時去るだろうか」ということである。とノイエス・ドイチュラントは述べた。東ベルリンの新聞は、西側地区の食糧倉庫の前で起つた暴動について報道した。西ベルリンの「テレグラフ」はただちに此等の報道を調査し、完全に無根拠なものであることを発見した。²⁹

ノイエス・ドイチュラントもテークリッヘ・ルントシャウも、空輸についての彼らの解釈、即ち西側諸国は其の略奪品を道路や鉄道で移動することが出来ないの、いまや飛行機を呼び入れて同じことをしようとしているという考えを、繰返して述べた。あちらこちらの街角に、人々を集めて会合を開くことによつて、人々の意見を動かそうとして失敗した西ベルリンの共産主義煽動者たちは、今度は新しい工夫を考えはじめた。これらの煽動者たちは、今度は労働服を着て正直な人のような様子をしながら、二人または三人と組をつくって歩いた。そのうちの一人が見知らぬ人と何か話をはじめるのが常であつた。誰か知らぬほかの人が此の議論に参加するや否や、二番目の共産主義者が其

の場に現れるのであった。このやり方がつづくのである。これは人々に対して、西ベルリンにおいては一人の民主主義者には一人の共産主義者が、すくなくもいるのだという印象を与えるために意図されたものであった。³⁰

ハンブルグの一新聞は、ベルリンでゼネストを行おうとした共産主義者の計画は、民衆の抵抗にあつて遂に放棄された旨を報じた。³¹

コマンダトゥーラ（四国統合施政部）からソヴィエトが脱退するという声明が発表された直後、市議会は七六通常議会を開いた。色々不安なニュースが入って来ているにもかかわらず、議員たちは「テレグラフ」によつて「模範的な態度」であると云われたような態度を示した。そして少しも神経質な兆候を示さずに、議事を運営した。³²

大部分のベルリン人たちが非常に驚いたことは、共産主義議員が予備会議 previous session の討議に参加せず、其の日の議題のうち四十五項目の処理に協力したことであつた。

ベルリン外部からの経済援助は増大しはじめた。社会民主党の執行委員会は、同委員会がストックホルムからの電話の呼出しを受け、スエーデンの社会民主党員がベルリンへ補給するための食糧品を買うために、ハノーヴァーへ二万五千スエーデン・クラウンを送つたこと、そして、スエーデン人たちは将来さらに援助を増大させるであろうという知らせを受けた旨を報じた。西ドイツ州議会財政委員会（The Finance Committee of the West German Länderetat）は、来たるべき二週間の必要にすぐ応じられるように二千万マルクの借款を提供し、西ベルリン政府の自由処分に委せるべしという勧告を受けた。³³

七月一日および七月二日にかけて、西ベルリン全体にわたつて大衆の会合が開かれたが、それはベルリン人たちに最近の状況を知らせ、共産主義者の圧迫に抵抗しようとする彼らの決意を強めんがためであつた。シュテクリッツの

市長代理ヴィレは降雨にも拘らず、シュテクリッツの市区ホールの前に集まった萬を越える聴衆に対して、次の如く語った。「共産主義者たちは、共産主義者たちにとってのベルリン根拠地、したがってドイツ全体の根拠地をつくることに決して成功しないであろう。」「すべての自由愛好諸国が知らねばならないことが一つある。それは、吾々は共産主義者になるよりも、飢えた方がよいということである」と彼は叫んだ。テンペルホーフで行われた集会においては、その地区長 (mayor of that borough) は、東管区の警察の行動と、二万人の幼児たちからミルクを奪ったソヴィエトの措置を非難した。彼は西側地域への回廊を確保することが、ベルリンにとって絶対に必要である旨を述べた。中立的な回廊をつくれという同じような要求が、独立派組合の指導者であるエルンスト・シャルノウスキーによって述べられた。彼は其の事をクロイツベルク地区において行われた組合役員の会合において述べたのである。シャルノウスキーはまた、英国地区にある共産主義ラジオベルリンの放送室を閉鎖し、東ベルリンで解雇された民主主義的な市の雇員に、西ベルリンで社会主義統一党の支持者たちが従事していた仕事を与えるよう要請した。³⁴

挑戦的精神がたかまってくるにつれて、行政上の問題も増えて来た。西ベルリンの指導者たちは二重通貨制度による圧迫を感じはじめていた。アメリカ合衆国地区のすべての警察の代表者たちが採択した決議は、警察における支給は西側マルクでなされるよう要求していた。英国地区およびフランス地区の警察当局は其処に働く人たちが、ソヴィエト管理の「壁紙マルク」は、いずれにしる貰いたくないと考えている旨を報じた。これらは市当局にとって、以後引続いて頭痛の種となるべき長い一連の同じような要求の、最初の一例に過ぎなかった。税金および市の事業（市電や郵便局のような）においては、東マルクのみが取扱われたが、総ての市の職員たちは俸給袋用としては、もっと価値ある西側マルクを希望していた。³⁵

七月二日（金曜日）——新しい空輸の目標——

フランクフルトにおいて米国空輸部隊の司令官スミス將軍が、新目標が定められた旨を報道関係者に述べた。それは、四発のスカイマスター五二機と複発のダコタ百機から成る飛行隊で、ベルリンへの空輸を一日に四百五拾回行なうというものであった。アメリカの飛行機は「実質的に毎日千トン以上運ぶことになる」と彼は予言した。³⁶

ベルリンの一記者は、空輸作業を視察するためにベルリンのガトウ飛行場から西独のヴェンシュトルフにある英国空軍の基地まで飛んだ。ヴェンシュトルフで彼は、六〇時間ぶつつづけに飛行機への積荷作業をし、それから三十六時間休息するという生活をしてきたサクソンの一労働者に会った。そのサクソン人は真似の出来ない方言をつかって「それは本当につかれますよ。でも、ベルリン人たちを見殺しにすることは出来ません」と語った。³⁷

ワシントンにおいて行われた閣僚会議で、國務長官マーシャルはベルリンの事態について論じ、國務省がスターリンへ送ろうとしているメッセーヂの写しを読み上げた。それはベルリンに駐在する西側諸国の立場を正当化する道德的・法律的な根拠について述べ、彼らがベルリンにとどまろうとする決意を再確認したものであった。マーシャル國務長官はまた、ベヴィン外務大臣が、英国内にB29爆撃機二編隊の基地を設けることに同意したことを報告した。だが少しばかり驚きに値することは、此の時國務省がダグラス大使に訓令を発し、此等の爆撃機編隊の到着が英国の輿論に与える影響を、ベヴィンが充分に探求し考察したかどうかを、ベヴィンに尋ねるよう求めた事であった。一方、國務省は英国への重爆撃機の派遣がアメリカの輿論に対してのみでなく、ロシア人に対しても持つであろう影響の程度をはかっていた。「彼（マーシャル國務長官）は、刺激的な行動だと解釈されるかも知れない此のやり方が、吾々自身の国民にどのような思われるか、その程度に従ってロシア人への影響も調整されなければならぬと言った……」³⁸

共産主義者が支配権を握る東ベルリンのドイツ人民評議会 German Peoples' Council で、重要かとも思われる二つの陳述がなされた。その一つはベルリン社会主義統一党の役員・ヘルマン・マテルンがしたもので、彼は市長代理のルイズ・シュレーダーが其の日、ソヴィエト軍政府の命令のみに従い、西側からの命令を無視するよう指令を受けたと述べた。彼はさらに続けてベルリンがばらばらに分裂させられるか、或は最終的に一個の行政権に服するか、はっきりする時機が来たと述べた。彼はさらに付け加えて、東地域の一部として、ベルリンはドイツの此の東半分の経済体制に編入されなければならぬと言った。数時間後、明らかにより上層の共産主義機関からの叱責を受けて、彼は前言を打ち消し、先に述べた言葉は誤りであったと述べた。³⁹

もう一つの陳述は、人民評議会の役員・オットー・ヌシュケのしたもので、彼はドイツ平和条約を討議するために直ちに外相会議を開催するよう要請した。⁴⁰

此の外相会議開催の提案は、其の後数日間にあたって、共産主義およびソヴィエト側から来るニュースによって繰返されたものであった。

東ベルリン警察は英米蘇の三地区が合流しているポツダム広場で手入れを三回行なった。彼らは通行人の身元証明書を調査し、書類カバン、ポケットおよび紙入れの中に西側マルクが入っていないかどうかを探索した。此の手入れの犠牲になった人たちは、トラックに乗せられて東地区の警察署に運ばれた。そこで彼らの所持していた西側マルクは取り上げられ、裁判にかけられることになるだろうという脅迫を受けた。しかし、僅か数時間後には釈放されるのが常であった。一報道によれば、社会主義統一党の警察本部は、社会民主党員であることが分っている三十一人の上級警察官に、此等の手入れを指揮するよう命令した。もしもこれらの警察官が十分な数の人民を逮捕せず、或いは、

充分な量の西側マルクを没収しないならば、解職するという脅迫を受けたり、或いは投獄するという脅迫さえ受けた。ターゲスシュピーゲルは、政治的に意見の対立する者たちに犯罪行為を強いることによって、妥協せざるを得ないような立場に追いやるのは、典型的なナチスの戦術であると激しく其の意見を述べた。

西ベルリンにおける反抗的な集会は続いた。フランス地区で行われた集会で、社会民主党の一演説者は、ソヴィエトがベルリン封鎖について陳腐な言訳をしていることは、退却するための逃道を残しておこうとしている証拠であると述べた。^{④①}

別の集会でキリスト教民主同盟のスポークスマンは封鎖が進行するにつれてより、一般的になった考え方を述べた。「吾々ベルリン人の特徴である控え目な態度で、次の如く言わせて貰いたい。すなわち、西側諸国が自由な立場を擁護しているのと同じように、我々ベルリン人は西側諸国の国際的な政治的立場を擁護しているのであると」^{④②}

シャロットテンブルグ Charlottenburg においては、地区長代理が群衆に対し、十二年間にわたるナチスの独裁もベルリン人たちがナチスにしなかった。彼らがまた共産主義者になる筈がないと述べた。チアガルテン地区においても区長が聴衆に対して、「此の頃では、ベルリン人の一人一人が、其手にベルリンの運命を握っているのである」から、冷静な態度を維持するよう強く訴えた。^{④③}

ハンブルグでは、ベルリンへ同情する意味で行われた巨大なデモンストレーションに参加した人たちが、ベルリンの三つの民主主義政党の代表者の演説を聞いた。キリスト教民主同盟のヤコブ・カイザーはベルリンと西側地域との間に回廊が設定されるべきだという要求を繰返した。そしてベルリンのための闘争の大きな政治的意義を強調した。

「ベルリンは最後の門であるという自覚が次第に強くなりつゝある。もしも共産主義がこの門を突破して流れ込む

ならば、革命の波は西に向って殺倒するであろう。そうすれば、すべての人民の落胆は非常に大きなものとなり、其の結果、すべての防衛力は不具になってしまふであろう。^④

これと僅かばかり違った表現ではあつたけれども、クレイ將軍は殆んど三ヶ月も前に、陸軍省に対しテレタイプで同じような意見を具申した。其の考えはベルリンで賛同を得はじめていた。だが西側世界のもっとも影響力ある指導者たちの多くは、まだ其の考えの価値を認めていなかった。

七月三日（土曜日）——ソコロフスキー元帥の封鎖解除のための条件

西側三国の軍政官は此の危機を地方的に解決すべく総ての手段を尽そうとして、ポツダム近くのソコロフスキー元帥の司令部を訪れた。ロバートソン將軍が訪問者団のスポークスマンとなった。彼は占領諸国間の関係の悪化についての関心を述べ、通常の貿易協定を再び可能ならしめるような通貨協定を西側当局者は望んでいるということを、ソコロフスキーに対して述べた。クレイ將軍の述べるところによると「ソコロフスキーは丁寧な調子で彼の発言をささげり、吾々が西独政府についての計画を放棄するまで、技術的な困難はつづくであろうと述べた」。西独政府についての西側諸国の計画を封鎖の理由としてソヴィエト官辺筋が取り上げたのは、これが最初であつた。ソコロフスキーは通貨問題の討議をしようとさえしなかつた。^⑤

七月四日（日曜日）——市政府執行部に対する共産主義者の攻撃

ノイエス・ドイチュラントに発表した論文において、ベルリン社会主義統一党の委員長ヘルマン・マテルン

Hermann Matern は市政府執行部を攻撃し、秩序ある政権を確立するために「すべての理性ある人民」が協力するよう要請した。ソヴィエトの管理するテークリッヘ・ルントシャウおよび共産主義のベルリナー・ツァイトンクの表現はさらに露骨なものであった。テークリッヘ・ルントシャウに発表された一論文は市政府執行部を無能であり、且つ心から人民の利益のことを考えていないと非難した。ベルリナー・ツァイトンクは市議会の解散と市政府執行部の辞職を要求し、その代りに、種々の市民団体から指名された緊急委員会によってベルリンが統治されるよう提案した。

七月五日（月曜日）——共産主義者の非公式の交渉要求増える。

東ベルリンの「ナハト・エキस्प्रेस」は其の社説で、もしも四国会談が成功裡に行われるならば、ベルリンの事態は自動的に明瞭化されるであろうと述べた。また、西側諸国はドイツについての会談を、ポツダムでやめたところから取り上げなければならぬだろうと附加した。

ロンドンからニューヨーク・タイムズへ打った電文で、ハーバート・L・マッシュューズは、西側の二、三の外交界で抱かっていたらしい果敢ない望みを述べた。彼は三国軍政官がソコロフスキー元帥を訪問した時に、ベルリン水準の最後の望みが絶たれたことを指摘し、さらに次の如く述べた。

それ故、残されている只一の希望は、ベルリンにいるドイツ人のロシア人に対する反応が非常に悪く、西側同盟国に対する反応がきわめて良好なので、ロシア人たちが其の封鎖を実行する甲斐がないと決意するようになることである。

七月六日（火曜日）——外交交渉による西側の抗議とソヴィエトの飛行妨害

英国、フランスおよびアメリカ合衆国は、ロンドン、パリおよびワシントン在のソヴィエト代表に同じような抗議書を手交し、西側諸国はベルリン封鎖を「四占領国によるベルリン統治に関する現存協定の明白な違反」と看做す旨を明らかにした。それはまた、ベルリン統治に関して起り得るどんな意見の不一致についても、喜んで四国交渉をする用意がある旨を述べると共に、だが此の様な交渉は封鎖が解除された後においてのみ可能なのであって、脅迫の結果行われ得るものではない旨を強調した。^{④⑥}

ソヴィエト政府に検討の余地を与えるために、これらの覚書の内容は数日間公表されなかった。ソヴィエトが空輸を不能にしようと試みるかも知れないという兆候がいくつかあった。ソヴィエトの重戦闘機が空廊内を飛びまわるので英米当局は其の飛行士に、指定された航路内を飛行するよう嚴重警告し、五〇〇〇フィート以上の高度を飛ぶように通達した。其の日も晩くなってから、ソヴィエトは、空廊へのソヴィエトの妨害行為に対する先の米国の抗議への回答内容を発表した。その中でソヴィエトは米国当局が四国空輸規制協定が「一方的且専恣に破られるだろう」ことを決めたのだと主張した。覚書はまた、航空管制所のソヴィエト部がアメリカの空輸について充分な情報を受けていないことについて不満を述べた。またソヴィエトは、巨大な英国のサンダーランド飛行艇が着水態勢をとったハヴェル湖 the Haval Lake はソヴィエトの支配下にあり、使用してはならない旨の抗議を正式に英国側に手交した。最後に、四人のソヴィエト官吏がベルリンの航空管制所に現れ、アメリカ飛行機による「運輸規則の侵犯」について抗議した。^{④⑦}西ベルリンの朝刊は、ヨーロッパにおけるアメリカ合衆国 B 29 爆撃機の数は三倍に増加され、さらに其れ以上の数の戦闘機が、同じくヨーロッパに向いつゝあると報じた。^{④⑧}

西独からのニュースは、北ライン・ヴェストファーレン州がベルリンに一〇万トンの石炭を贈与することを決定したと報じた。同情が集まり、此の闘争しつゝある都市に贈物をしようというニュースが、西側地域のあらゆる場所からとどいた。⁴⁹

七月七日（水曜日）——石炭の空輸

此の日の午後二時三十分に石炭を載せた最初のアメリカ合衆国スカイマスター機が、テンペルホーフ飛行場に着陸した。すぐ其れに引続いてほかの五機も着陸した。一アメリカ空軍高級将校は、入って来る輸送機からの積荷をおろすために昼夜兼行で働いている約五百人のドイツの運搬人のすばらしい働きぶりを賞讃した。⁵⁰

ソヴィエトの後援する新聞は、いぜんとして四国会談の提唱をつづけた。「もしも平和を望むのならば、解決は一つしかない。それは交渉である」とベルリナー・ツァイトンクは書いた。そして交渉の議題は、単にベルリンのみではなく、全ドイツ問題でなければならぬと付け加えた。

七月九日（金曜日）——封鎖の危機感尖鋭化す

空輸はもう二週間もつづいていた。その結果米国空軍内部に、より楽観的な確信が抱かれはじめるに至り、封鎖は空輸で克服出来ると思われるようになった。⁵¹

だが、こういう楽観が一般的に抱かれていた訳ではない。「U・S・ニューズ・アンド・ワールドリポート」は其の論説で、ベルリン状勢のどたん場は冬まで延期されるであろう。何故なら其の時になれば、ベルリン人に充分な石

炭を空輸することは出来なくなり、其の結果もっと重大な危機が来るであろうから、と述べた。それはまた、西側諸国の二万四千の人々のうちの多くが、飛行機でベルリンを脱出することはあり得ることであり、ソヴィエトに反対の立場を堅く維持して来たドイツの指導者たちも又、飛行機で脱出するかも知れないと報じた。⁵²

ロンドンにおいては、「ニュー・ステーツマン・アンド・ネーション」が同様の意見を述べ、「だが専門家は誰でも、空輸に大きな心理的な効果があることは認めながらも、冬期のベルリン補給を空輸に依存することは不可能である」ということを知っている⁵³」と書いた。

ベルリン人たちも封鎖の危機を感じはじめていた。石炭および動力を保存するために、西側当局はきわめて厳格な電力並に輸送制限を発表した。東ベルリンの新聞は此の制限措置を大きく取上げた。そして彼らの政治的な主張を強めるために此の問題を取扱った。ノイエス・ドイチュラントは次の如く報じた。

Bマルク^{*}は西ベルリンをほろぼす——輸送は制限され、工場は閉鎖、そして支払もせず「立ち去る」のだ。

市政府執行部の多数の同意を得、社会民主党、キリスト教民主同盟および自由民主党の指導者のはっきりした同意を得て、西側占領国は別々のBマルクを導入した。

昨日、かねて予想し得たとおり、西ベルリン経済生活の重大な転換が行われた。専断的な電流停止のために、種々の事業が閉鎖を余儀なくされている。そして土曜日には職のないものが数万人に達するだろうと思われている。「政治的な」Bマルクのもたらす影響はすべての家庭で感じられるであろう。市電と地下鉄は一日のうちの大部分、運行を停止するであろう。

* 共産主義新聞によってBマルクと呼ばれる訳は、西独の通貨は夫々の上に大きくB（ベルリンの意味）とスタンプがおされて

あったからである。

此の記事は市政府執行部への烈しい非難となつてさらに続いた。

西側諸国はベルリンにとどまる権利を持っていないという自らの主張の線に沿つてソヴィエトは、市の財政部に米、英、仏の占領費支払を今後行わないよう命令した。西側諸国の司令官はたゞちに抗議したけれども無益であつた。何故ならば市財政部はソヴィエト地区にあつたからである。そのため、西側諸国はベルリンの費用を夫々の地区予算で賄うことを予儀なくされた。西側軍政役員はソヴィエトの出した此の命令を、ロシア当局がいままでにした行為のうちで、もっともあつかましいものであると非難した。⁵⁴

市政府の基金がソヴィエト地区に預託されていたという事實は、ドイツの当局者にとつてもまた絶えざる頭痛の種であつた。彼らは、市職員への支払にあてるために、充分な東側マルクを手渡してくれるようソヴィエト軍政府に懇願せねばならなかつた。そして多くの市職員への支払がずっと遅れることが何回もあつた。⁵⁵

七月十日（土曜日）——ワシントン、装甲部隊の採用を承認せず

クレイ將軍はワシントンに再び彼の意見を送り、ソヴィエトは戦争する気はないと述べ、力を示せば封鎖を破ることが出来るであろうと提案した。彼の確信は、「ロシア人たちは、実力の抵抗に遭うような方法を避けようとして氣をつかっている」ということを根拠としていた。特に彼がアメリカ当局に提案したことは、アメリカ合衆国がベルリンに駐屯する権利を持つものとして、特定の日に西独から武装した護送隊をベルリンに送り込むであろうということ、そして其の護送隊は、ソヴィエトが解決出来そうにも思われない「技術的困難」を克服し得るだけの設備を与え

られるであろうということを、ソヴィエトに通告すべきだといふのであった。⁵⁶

ベルリン問題を国際連合に持ち出す前に、武力紛争の危険をおかすことは正当ではないという理由で、此の提案はワシントンで却下された。クレイ將軍は多少の危険が伴うことは認めながらも、アメリカ合衆国は武力紛争の可能性に率直に直面すべきことを強調した。だが、彼は斯様な、護送隊が敵対行為を発生させるであろうような機会は、僅かなものであることを信じていた。一週間後ワシントンへの電文で彼は、アメリカ合衆国が断固たる行動をとれば、戦争することなしにソヴィエトの侵略行為を停止せしめるであろう。そしてそれは、ソヴィエトが次の行動に出てしまった後では、あまりにも遅すぎるだろうといふ彼の信念を繰返した。「それ（ソヴィエトの侵略）は、吾々が多少の危険をおかすことによつてのみ停止し得るであろう」。だがワシントンの正式の意見は、装甲部隊採用の考えに反対であつた。そして外交機関を通じての行動がつづけられた。⁵⁷

一方、ソヴィエトは空輸を妨害しようとする努力をつづけた。東独ニュース提供機関ADNによれば、ソヴィエト軍政府の参謀長は、米国ならびに英国の軍政官代理に書簡を送り、米英の飛行士が航空安全についての基本的規則を遵守していない事について抗議すると共に、二国の軍司令官がただちにソヴィエト地区上空の「不規則な」飛行を差止めるようにという希望を表明した。同日、アメリカ合衆国空軍は、ソヴィエト飛行機がフランクフルト・ベルリン回廊に沿つた二地点の計測器上空を飛行するであろうとの通達を受け、ベルリン航空管制所への事実の通達は行わないう旨を知らされた。同盟国空軍將校は、ロシア人は回廊を「彼ら自身の危険負担において」飛行するのであると説明した。⁵⁸

ソヴィエトはまた人々に、ベルリンとヘルムシュテットとの間の鉄道に、何か本当に故障があるのだと思ひ込ませ

ようと努力した。調査の結果、二人のドイツ人鉄道高級役員が、鉄道用地を荒廃のまま放置しておいたために餓首されたとソヴィエトは発表した。⁵⁹

七月十一日（日曜日）——世界注目の的のベルリン

「世界注目の的」という書出しでテレグラフは、オーストラリアの首相チフレー Chifley がベルリンに到着した旨を報じ、英国の航空大臣ヘンダーソンが次の日到着する予定であることも報道した。西ドイツの都市ハノーヴァおよびエッセンでは、大衆のベルリン同情集会が開かれた。⁶⁰

ベルリンで行われた大集会で、エルンスト・ロイターは、世界は自由であろうとしてたたかうベルリンを支持するであろうと述べた。「ベルリン人は（共産主義者の侵略に対する）此の反抗が、彼らの断固たる行動によって灯をつけられたのであることを誇ってよいであろう」⁶¹

七月十二日（月曜日）

ロシア官吏はベルリン運送会社（BVG）の労働者会議に対し、最近行われた労働組合選挙によって、独立派労働組合主義者が労働者会議の多数を占めた結果、新事態が発生するに至ったと声明した。今日以後、割当制度にはなっていない昼飯の管理を、共産主義者が支配するFDGB（自由ドイツ労働組合協会）がすることになる。ベルリン輸送会社の自由ドイツ労働組合協会の一代表者は、FDGBの会員証を示すことの出来る雇員のみが食事を与えられることになろうと付け加えた。⁶²

七月十三日（火曜日）——西ベルリンの産業を支配せんとする共産主義者の努力

自由ドイツ労働組合協会の執行委員長は、東地区の経済との提携を希望する西ベルリンの企業は原料を供給されること、そして、東ドイツ経済委員会に申し込めば、其の製品を販売する機会を与えられる旨声明した。⁶³

西側地区には大規模な失業状態が発生するかも知れない様子が顕著であったことから考えて、自由ドイツ労働組合協会の此の新しい戦術は、西ドイツの労働者や企業家の気持を大きく動揺させた。

七月十四日（水曜日）——ソヴィエトの覚書

七月六日の同盟国の抗議覚書の結果、封鎖は解除されるかも知れないという西側諸国の希望は、ソヴィエトの回答によって粉碎されてしまった。ソヴィエトは、ベルリンの事態は

ドイツおよびベルリンに関する四国の決定事項を、米英仏の政府がまもらないことから生じて来たもので、こういう協定違反は、此等三国政府が別箇の通貨改革を実施したこと、ベルリンの西側管区に特別の貨幣を導入したこと、およびドイツの解体政策となって現れている。

と主張した。

其の覚書はさらに続けて、ソヴィエト政府は交渉には反対しないが、交渉の予備条件は受諾しない（即ち、封鎖を解除しない）。また、交渉をベルリン問題に限定することにも賛成出来ない。何故ならば、ベルリン問題は全体としてのドイツ問題と別箇に考えることは出来ないからだと述べた。

また、ソヴィエトは「ベルリンはソヴィエト地区の中心にあり、ソヴィエト地区の一部である」と主張した。ま

た、ベルリン統治に関する同意済の決定事項を侵犯することによって、西側諸国は、此の都市の占領に参加する権利を「無にして」しまったと述べた。さらに其の覚書は続けて、ソヴィエト軍政府はベルリン住民の福祉に常に關心を抱いて来た。そして、もしも必要ならば、大ベルリン全域に充分な補給をしようとするであろうと述べた。⁶⁴

ソヴィエトの覚書が現実に受取られる前においてすら、ソヴィエトの出版するテークリッヘ・ルントシャウは、其の日もつと早いうちに、クレムリンの態度を予言していた。其の記事は、四国交渉をベルリン問題だけに限定出来るという考え方を、「笑うべきもの」として却下した。そして交渉のための唯一の健全な基礎として、ヤルタ協定、ポツダム協定およびソヴィエトと衛星国外務大臣たちの間で取り上げられたワルソー・コミュニケをあげた。

七月十五日（木曜日）——空輸に再び関心あつまる

ソヴィエト覚書の妥協の余地のない調子の一結果とも思われるが、米英両当局者は空輸をさらに発展させることが出来るという事実を強調した。ベルリンから丁度帰って来たばかりの英国空軍長官 British Secretary of State for Air アーサー・ヘンダーソンは、ロンドンプレスに、英国空軍の努力はまだ頂点には達していないと述べ、冬の天候がはじまっても、飛行を不可能にすることはない旨を、総ての人に保証した。⁶⁵

フランクフルトにおいてはクレイ將軍が、「総出動の」空輸は未だはじまっていない。そしてもしも必要ならば西側の飛行機は毎日ベルリンへ五四〇〇トンの補給品を運ぶことが出来ると述べた。⁶⁶

テークリッヘ・ルントシャウは別の論説において米英の飛行士を非難し、彼らが空廊における航空安全規則を遵守していないと述べた。そしてソヴィエトの航空専門家の言葉として、空廊問題を解決すべき時機は来たと述べた。そ

して其の解決には空廊の数をへらすという形をとるべきだということが提案された。

空廊におけるソヴィエト戦闘機の活躍が、非常に増大したことに、西側当局は悩まされた。そして、ソヴィエトはテンペルホーフおよびガトー飛行場の近くに阻塞気球をあげるのではないかとの憂慮が抱かれた。「信頼すべき筋」の報道として、ソヴィエトの一官吏が東独新聞の編集者グループに、ソヴィエトは空輸を不可能にすることが出来れば、八週間以内にベルリンから西側諸国を追出せるものと思うと言ったということが伝えられた。⁶⁷

英国の空軍関係者も米国の空軍関係者も、共に空輸作戦の重荷を感じはじめていた。大部分の飛行士が平均して三十二時間のうち七時間以上の睡眠をとることは出来なかった。飛行時間に加うるに彼らは、地上勤務にも非常に多くの時間をさかねばならなかった。非常ではない普通の予定でも、九時間飛行、十八時間地上勤務、そして其の後に八時間の睡眠をとるのが常であった。最初の一ヶ月が終りに近づくにつれて、飛行時間のうち六八パーセントまで計器をにらみばなしであったという一飛行士は、其の反響を次のような言葉であらわした。「すぐに私は自分に言いきかせた。『拗ねることはないぜ』 仕事はようやく緒についたばかりだ」。⁶⁸

西側の飛行士たちがガトウおよびテンペルホーフを出たり入ったりして、重い輸送の歯車をまわしている間に、ワシントンで開かれた国家安全会議は、六〇台のB29爆撃機を英国の基地に派遣することを決定した。フォレスタルは此の決定の背景をなす理由づけを次の如く要約した。(1)此の行動はアメリカの国民に、政府がベルリン危機をいかに重要視しているかを示すであろう。(2)それはアメリカ合衆国空軍に此の種の形態の作戦経験を与え、また英国人が同盟国空軍への適応態勢をとることに慣れさせるであろう。(3)ひとたび飛行機が英国に駐屯するに至れば、承諾されたものとして或る種の固定化の役割を果すであろう。もしも飛行機を派遣する現在の機会が失われるならば、そしてヨ

ヨーロッパがその後で悪化するならば、英国人は飛行機を受け付けようとしなないかも知れない。⁶⁹ 其の日の夕方、ワシントン政府はB 29型飛行機が金曜日にアメリカ合衆国を立って、英国内の英国空軍基地に向うであろうと発表した。此の飛行は通常の練習飛行であると言われた。⁷⁰ だがこれは、アメリカ合衆国のはじめての戦略空軍基地を英国内に設けるに至ったものであった。

註

- ① The Forrestal Diaries, pp. 454-455. (P. Davison. Berlin Blockade, 1958, p. 399)
- ② The Forrestal Diaries, pp. 454-455.
- ③ Tagesspiegel, June 29, 1948.
- ④ Tagesspiegel, June 29, 1948.
- ⑤ "One Year of the Berlin Airlift," Fighting Forces, August, 1949, p. 145.
- ⑥ Telegraf, June 29, 1948.
- ⑦ Tagesspiegel, June 30, 1948.
- ⑧ Berlin Airlift-A USAFE Summary, op. cit., 4-5; and Davison's personnel interviews.
- ⑨ Paul W. Fisher, "Berlin Airlift," special issue of The Bee Hive (quarterly), United Aircraft Corporation, East Hartford, Conn., Fall, 1948, p. 9.
- ⑩ Stenographic Minutes of the Berlin City Assembly, I, 75th Session, June 29, 1948.
- ⑪ Stenographic Minutes of the Berlin City Assembly, I, 75th Session, June 29, 1948.
- ⑫ Luftbrücke Berlin, a pictorial report published by the Magistrat of Greater Berlin, Arani Verlag, 1949, p. 15.
- ⑬ Stenographic Minutes of the Berlin City Assembly, I, 75th Session, June 29, 1948.
- ⑭ UGO-Erster Geschäftsbericht, Unabhängige Gewerkschafts-Organisation (Independent Union-Organization) of Greater Berlin, 1949, pp. 140-141.

- ⑮ UGO-Erster Geschäftsbericht, Unabhängige Gewerkschafts-Organisation (Independent Union Organization) of Greater Berlin, 1949, p. 139.
- ⑯ Tagesspiegel, June 30, 1948.
- ⑰ Tagesspiegel, June 30, 1948.
- ⑱ Tagesspiegel, June 30, 1948 and the New York Times, June 30, 1948.
- ⑲ The New York Times, June 29, 1948.
- ⑳ The New York Times, July 1, 1948, 『ベルリン封鎖の全史』の272頁 Beate Ruhm von Oppen (ed.), Documents on Germany under Occupation, Royal Institute of International Affairs, Oxford University Press, London, 1955, pp. 308-314 参照。
- ㉑ Documents on Germany under Occupation, p. 313.
- ㉒ The New York Times, July 1, 1948.
- ㉓ Tagesspiegel, July 2, 1948; and Die Welt, July 1, 1948.
- ㉔ Neues Deutschland, June 30, 1948.
- ㉕ Telegraf, July 2, 1948. ベルリン封鎖の全史の272頁 Document on Germany under Occupation, pp. 314-315 参照。
- ㉖ Berlin Sector, p. 26.
- ㉗ Report of the U. S. Military Governor for July, 1948, p. 1.
- ㉘ The New York Herald Tribune, July 2, 1948.
- ㉙ Telegraf, July 2, 1948.
- ㉚ Tagesspiegel, July 1, 1948.
- ㉛ Die Welt, July 1, 1948.
- ㉜ Telegraf, July 2, 1948.
- ㉝ Ibid., and Tagesspiegel, July 2, 1948.

- ③④ Telegraf and Tagesspiegel, July 2 and 3, 1948.
- ③⑤ Tagesspiegel, July 2, 1948.
- ③⑥ The New York Herald Tribune, June 3, 1948.
- ③⑦ Telegraf, July 3, 1948.
- ③⑧ The Forrestal Diaries, pp. 455-456.
- ③⑨ Telegraf, July 3, 1948.
- ④⑩ The New York Times, July 3, 1948.
- ④⑪ Telegraf, July 3, 1948.
- ④⑫ Telegraf, July 3, 1948.
- ④⑬ Telegraf, July 3, 1948.
- ④⑭ Tagesspiegel, July 3, 1948.
- ④⑮ Clay, Decision in Germany, New York, 1950, p. 367.
- ④⑯ The Berlin Crisis: A Report on the Moscow Discussions, 1948, Department of State Publication 3298, U. S. Government Printing Office, Washington, September, 1948, pp. 7-8.
- ④⑰ The New York Times, July 7 and 8, 1948.
- ④⑱ Telegraf and Tagesspiegel, July 6, 1948.
- ④⑲ Tagesspiegel, July 6 and 7, 1948.
- ⑤① Tagesspiegel, July 8, 1948.
- ⑤② "A Special Study of Operation 'Vittles'", op. cit., p. 8.
- ⑤③ U. S. News and World Report, July 9, 1948, pp. 11 and 13.
- ⑤④ The New Statesman and Nation, July 10, 1948, p. 21.
- ⑤⑤ The New Statesman and Nation, July 10, 1948, p. 21.
- ⑤⑥ Howley, op. cit., p. 212.

- ⑤6 Clay, op. cit., p. 374.
- ⑤7 Clay, op. cit., p. 374.
- ⑤8 The New York Times, July 11, 1948.
- ⑤9 The New York Times, July 11, 1948.
- ⑥0 Tagesspiegel, July 13, 1948.
- ⑥1 Telegraf, July 12, 1948.
- ⑥2 Tagesspiegel, July 13, 1948.
- ⑥3 Tagesspiegel, July 14, 1948.
- ⑥4 The Berlin Crisis, pp. 10-15.
- ⑥5 The London Times, July 16, 1948.
- ⑥6 The New York Times, July 16, 1948.
- ⑥7 The New York Times, July 16, 1948.
- ⑥8 The Bee Hive, op. cit., p. 7.
- ⑥9 The Forrestal Diaries, p. 457.
- ⑦0 The New York Times, July 16, 1948. (Phillips Davison, op. cit., p. 401.)